

アート

は

おとどけ

できるのか？



撮影 札幌市立白楊小学校×加賀城匡貴

## はじめに

「アート」とは「おとどけ」できるものなのか？

アーティストの藤木正則氏が、私たちに投げかけた本事業を象徴する事業名に対しての疑問と違和感から、2014年度の活動は始まることになった。

2008年度からスタートした「おとどけアート」事業は、2014年度で丸7年を経過した。

そもそもこの事業は、2004年に十勝地方でスタートしたアーティスト・イン・スクール事業に端を発する。当初は、アーティストの創作活動の現場として学校を位置づけ、そこで起きうる様々な変化を体現する為の場づくりを展開してきた(所謂アーティスト・イン・レジデンスの現場を学校に設定したことがきっかけとなっている)。その後札幌では、アーティストが提案する活動をきっかけに、学校という枠組みや環境に潜む余白の可能性を生み出すことで、小学校を周辺地域のコミュニティーの核となる「人が寄り合う場」の創出を目指してきた。

事業開始時点では、小学校の関心度が低く、事業の開催自体が困難な状況であった。その為、アーティストを講師ではなく転校生という形で紹介することや、休み時間等の余白の中で活動を展開すること、余剰教室の活用した場づくりなど、学校が異分子を受け入れやすい仕組みを構築しながら実績を積み上げていくことに奔走してきた。結果、現在では、その認知度が徐々に高まり、小学校から実施の要望が挙がるまでに至っている。事業を展開していくうえでの学校とのネットワーク形成や教職員の方々との親密度という点においては一定程度の成果と可能性を見出してきた。

しかし一方で、具体的な状況の変化という点においては、まだまだ達成度は低い。

本事業によって生み出された場をきっかけに、多種多様な人々が学校に訪れ、教育活動の枠組みでの目的以外に学校が活用されている例はごくわずかである。

むしろ私たちの運営そのものが、これまでに構築してきた仕組みや方法論にとらわれ、「アートによる体験の場」を生み出すことに終始するあまり、活動プログラムそのものが形骸化していく傾向にあると指摘する向きもある。

また、「アーティストが、何か面白いことしてくれる事業」という安易なイメージの固定化につながる可能性が危惧される。それは、本来ならば学校関係者と共に考えながら状況の変化を生み出し、育んでいくべき活動が、本質的な目的の共有が充分になされていないことにより、一方的なアートの体験プログラムの提供に留まっていることを示唆する。

そもそも、私たちがもたらそうとしている状況の変化は、特に教育現場という厳格な枠組みを持つ場においてもっとも倦厭されるものなのかもしれない。しかし、現状の学校ができること、受け入れてしまえることを私たちがあえて提供する必要はない。学校に潜む余白の可能性を生み出す為のこの種の事業が、既存の枠組みの中に収まってしまふことこそが、もっとも無意味な状態ともいえるだろう。本事業に対するイメージの固定化やプログラムの形骸化は、そうした無意味な状態に陥る予兆であり、大きな意識の乖離や誤解を生むことに繋がるといっても過言ではない。

私たちが向き合うべき問題の本質はどこにあるのか。

そもそも「アート」は「おとどけ」できるものなのか。

現状を打破する為には、これまでの事業の在り方、考え方を再度見直し、今までの前提を覆す活動展開について考え、実践する必要があった。

本冊子は、そうした問題意識の基に、過去のおとどけアート記録集の体裁を大きく変え、コーディネーションに関わったスタッフを中心に、参画していただいたアドバイザーやアーティストの視点を含めた、今年度に取り組んだ新たな試みや変化についての検証と記録である。

私たちは、事業の主体者として、この問題を自分たちだけの課題として片付けてしまうのではなく、今後、学校という現場においてアートを扱う人々に向けて、今年度の様々な取り組みで得られたことをあえて共有したいと考えるに至った。

発行にあたっては、ご協力いただいた関係者の皆様に感謝申し上げるとともに、一人でも多くの方と、私たちの取り組みについて共に考える機会になることを願っている。



## アートをとどける

2014 年度おとどけアートアドバイザー  
難波祐子

「おとどけアート（アーティスト・イン・スクール事業）」は、その前身となる十勝での活動を入れると実に10年以上に渡って、札幌市内の小学校を中心にアーティストを派遣する事業を行ってきた。アーティストを学校に派遣する試みは、日本各地でNPOなどが主体となって実施している近年人気のプログラムだ。その多くは図工や総合の時間の延長線上に位置付けられ、アーティストが先生となって授業を行い、子どもたちがアーティストの指導で絵や工作などの何かしらの「作品」を作ることが期待される。実際、おとどけアートの活動でも、これまでそうしたワークショップ形式で子どもたちと作品を共同制作するケースが定番となり、好評を博してきた。ここでとどけられたアートは、主には子どもたちが作ったモノであり、作品である。だが、このある意味よくも悪くもわかりやすい作品となったモノたちを作ることで、アーティストは「アートをとどけた」、また学校側は「アートをとどけられた」と安心してしまっていないだろうか。こうした作品作りそのものは、本来、おとどけアートがとどけたかったものなのだろうか。そもそも「アートをとどける」とはどういうことだろうか。こうした問いかけから、2014年度のおとどけアートを実施する上で、「アートをとどける」意味についてももう一度考えてみたいと思い、従来のワークショップ型のとどけ方だけではないアプローチが取れないかという提案を実行委員会のメンバーに投げかけた。結果としてダムダン・ライ、加賀城匡貴、藤木正則、持田敦子の四名が招聘された。いずれも子どもたちといわゆる図工の時間に作るような「作品」を作らない作家ばかりが今回顔を揃えることとなったのは、極めて意図的な選択だった。

アートは、日常とは異なる時空間を私たちにとどけてくれる不思議な力をもっている。アーティストは、そのアートの力を伝えてくれる使者だ。おとどけアートでは、これまでアーティストを紹介する上で「転校生」というフレーズを用いてきた。おとどけアートのとどけるアートについて考える上でこの「転校生」は、非常に大切なコンセプトだ。アーティストは「先生」ではない。先生は学校の先生に任せておけばよい。



写真 札幌市立山鼻小学校×持田敦子

転校生は、普段の子どもたちの学校生活に何か新しい風をもたらしてくれる。また転校生自身は、新しい学校で、これまで自分が慣れ親しんできたものとは違う環境から新鮮な刺激を得る。そもそも、おとどけアートの活動拠点である札幌という街自体、明治期から外部の人たちが数多く流入してきた都市で、誰かが外からやってきて何かをする、ということに意識的にならざるを得ない土地柄であり、それが札幌独自の文化を創ってきた。札幌市内の小学校でアートをとどける活動も、単にモノとしてのアートをとどけるのではなく、外部からやってきたアーティストが転校してくることで、子どもたちの心に新しい閃きや気づきをもたらして、彼らが普段の学校生活から一歩距離を置いて、自分たちの立ち位置を考えるきっかけとなっているのではないだろうか。またアーティストにとっても、普段、作品を発表するギャラリーや美術館とは異なる空間で、子どもたちと一緒に過ごす時間は、子どもたちが受けるのと同じように、あるいはそれ以上に刺激的な経験となっているはずだ。今回のおとどけアートで四名のアーティストがとどけたものは、モノとしての作品ではなく、アートのもつ力を感じるきっかけの数々であり、「アーティスト＝転校生」としてのおとどけアートの活動の原点に立ち返ったものだったのではないだろうか。彼らが転校してきたことで、子どもたち、先生たち、周りの大人たちの心の中に何かひっかかるものがとどけられていれば、それは次に別の何かを生み出す種となる。生み出されるものは、必ずしもいわゆる「アート作品」ではなく、今までとは何か違う友達とのつき合い方や、学校という場所の使い方、先生や大人との関わり方、自分の学校での過ごし方といったことかもしれない。だがそれはアーティストがとどけるアートの力によってしか生まれない類のものであり、それこそがおとどけアートがとどけるべきアートなのではないだろうか。これからも、おとどけアートの活動によって、どんなアートの種が子どもたち、先生たち、そしてアーティストたち自身の心にとどけられていくのか楽しみだ。

# 50のいたずら 札幌市立元町小学校 × ダム・ダン・ライ



9月17日(活動2日目)

朝。子どもたちの授業中に、トイレでなにやらやってるライさん。  
トイレットペーパーの端をいじって・・・昨日授業で披露したバレリーナです。  
「トイレに入ってきたら皆びっくりするだろなー」  
この一コマで、今回のおとどけアートの雰囲気はつかんでもらえるかもしれない。ライさん、思いついたらなんでもやっちゃいます。ニヤニヤしながらやっちゃいます。思いつきから始まり、全階のトイレでやりました。用務員の方は、トイレットペーパーの補充中にいたずらを発見し、とても驚いたとの事。



9月19日(活動4日目)

床にバレリーナ設置。  
先生も子どもも踏みそうになります。すぐに「ライさんか!」と犯人確定。  
こんな些細ないたずらだけど、皆立ち止まって、眺めています。  
いたずらって相手がいないと絶対に成立しないものですね。場所に仕掛けたいたずらであっても、それを見るであろう誰かを相手にしている。  
ライさんが起こす仕掛けに、子どもや先生方が様々な反応を示し、ときに共鳴し、相互作用していく。ひとつのドキュメントを見ているようです。



9月22日(5日目)

授業中は子どもたちがいなくなります。当然。  
誰かいたずらできる人はいないか、と歩き回るライさん。探します。  
「いた!」  
教務主任の先生にもお面をしてもらいます。  
「ライさんまた何やってるんですか!」と先生。  
先生方もライさんの人柄をつかみつつあるようです。

(活動ブログ抜粋)

## ■活動内容

今年、50周年を迎える元町小学校を舞台に、芸術家のダム・ダン・ライさんが「50」のいたずらをテーマに創作活動を行いました。小学校の中に「おどろき」「びっくり」「ドキドキ」「ワクワク」を演出・創作し、それをきっかけに学校に集う様々な人達がつながり、交流するような状況を生み出すことを目的としました。小学校に滞在中は、登校時間にアート作品を発表したり、クラスの中にお邪魔して新聞紙を用いたワークショップを行ったり、児童玄関や中庭を作品によってデコレーションしたり、太鼓演奏(児童)とのコラボレーションによる一般公開のライブペインティングの開催をしたりと、様々な取り組みが行われました。日々、変化してゆく小学校の状況や、ライさんが仕掛ける様々ないたずらによって、子ども達だけでなく教職員や保護者といった大人も、ひと時の「非日常」を楽しめるような活動が行われました。

## ■活動概要

期間：2014年9月16日(火)～9月26日(金)

参加対象人数：児童数664名／教職員数41名／一般参加 約80名 計 約785名

活動場所：空き教室、音楽室、図工室、中庭、グラウンド等



ダム・ダン・ライ 小樽在住／彫刻家・画家

北海道の大自然に感銘を受け、その素材で空間を変容させる存在感を放つ作品の創作を目指す。エネルギーに北海道の四季に呼応し、独自の色彩感覚でその移り変わりや劇的な様を木や金属、石などの材料に映し出す立体作品を制作。創作のみならず、ワークショップや、アートイベント等の活動も広く行っている。小樽市にアトリエ兼ギャラリー「DataSpace(ダラスペース)」を設立。

HP : <http://www.dalospace.com/>

## 余白を浮かび上がらせる

学校で活動していると、「アーティストがやりたいと言うなら」「アートだから」といった理由で、なかば特例として実現されるような活動がある。でも、それはアートではなくても実はできるのではないだろうか。学校には本当は多くの余白があるのではないだろうか。

活動期間中、ダムダンライは様々な「いたずら」を学校全体で繰り広げた。反応は様々であった。熱狂的にいたずらに加わる子どももいれば、遠目でニヤニヤと眺めている子もいた。注意してくる高学年の子どもがいたり、ハラハラしながら見ている先生もいた。

みんなで一つの物を作り上げるわけでもなく、ときに先生も子どもも誰も見ていないところで、何か新しく楽しい「いたずら」をその場その場で考えて実行してきた。

そもそも「いたずら」がおもしろいのは、そのコミュニティに存在する規範から少しはみだす行為だからだと思う。逆に言えば、前提となる枠がなければ「いたずら」は成立しないし、楽しくもないだろう。

学校にも一定のルールがあり、それが学校の日常を成り立たせている。その規範を強く内面化している人もいれば、そうでもない人もいる。だから、学校の中でも個人によって持っている枠は微妙に異なるだろう。そういう同じ規範意識を持っていて、かつ同時にばらばらな人たちが一緒になって学校という空間を形成している。

とすれば、ダムダンライが行った幾つもの「いたずら」は、元町小学校の枠、その人の人々の枠を少し広げていたのかもしれない。あるいは、元々あった余白、でも気付いていなかった余白を浮かび上がらせていたのかもしれない。

ダムダンライが、素朴に楽しさを求めて即興で展開していったアクションに、学校の日常からの差異を違和感として感じる人は多くいただろう。とりわけ教職員の中には学校のルールとの間での葛藤があった。

同時に、ダムダンライがなにかアクションを起こすとき、そこには様々な眼差しや思考が生まれていた。それがきっかけとなって、学校における暗黙の前提が少しずつ揺さぶられ、そこに関わる人の中で対話が展開していった。

本当は余白がたくさんあるのに、勝手に枠を設定してできることを制限してしまう状況に対し、その前提自体を見直したり、新たな可能性を浮かび上がらせたりすることが、アーティスト・イン・スクールの意味として考えられうる。特に元町小学校のダムダンライの活動ではそれが濃厚に感じられたのである。良い意味でアーティストはどこまでいってもよそ者であるから、わざわざよそ者が学校に入っていく意味もそういうところにあると思う。

コーディネーター 石島耕平



# ハイズリマワツテミル 札幌市立藻岩小学校 × 藤木正則



## ■活動概要

藤木正則さんが小学校に滞在し、子どもたちや教職員の方々と様々な場面で対話していく活動を展開しました。

その様子は、ヘルメットに設置されたレコーダーに録画されており、校内10か所に設置された「伝言モニター(デジタルフォトフレーム)」で再生されてゆきました。

一連の行動・行為から立ち上がってくるものとは何か?を今回の活動に関わるあらゆる人たちと共に考え、これまでのおとどけアートでは見出すことができなかった状況の変化を生み出すことにチャレンジしました。

## ■活動概要

場所：札幌市立藻岩小学校

期間：2014年11月4日(火)～15日(土)

参加対象人数：児童数355名/教職員数30名/一般参加者約40名

活動場所：空き教室、音楽室、図工室、中庭、グラウンド等



藤木 正則 旭川市在住/行為情報体

1970年代後半からこれまで、主に街中で行為性の強い作品を展開しており、日常の些細な物事を出発点に、自らの「行為」と身近なメディア(絵葉書、FAX、映像など)を通し表現活動を行っている。





## 「体験の場」と「思考の場」

これまでのおとどけアートでは、考えることも無かった取り組みがこの藻岩小学校という現場で展開された。

藤木氏は言った「なにも起らないかもしれないけれど、それでも良いですか？」

それは運営側からみると「何もしない!」という感触であった。

この活動は、これまで当然のごとく生み出してきた「アートによる体験の場」を前提とせず、とりあえず棚上げすることから始まったのだ。それは、本事業の在り方や私たちコーディネーターの意識に突き刺さる強烈な問いであったと同時に、学校教育に対する問題提起でもあったと推測する。

何もしないと宣言しながら、ただその中で、圧倒的に取り組んだことがある。

「自ら考える」ということと「他者と向き合う」ということだ。

特別な何かを仕掛ける訳でもなく学校中を歩き回り、時に先生、時に子どもたちと会話する。そして、何もしない空き教室の中で、教育現場の日常やこの活動そのものの違和感や気付いたことについてアーティストとスタッフで話し合う。日々その繰り返しである。

このいたってシンプルな活動が、これまでのおとどけアート事業では欠落していたことが徐々に理解できていった。

「何かしなくてはいけない」という前提にとらわれ、その段取りに追われていく中で、取りこぼされてきた物事が多々あったことを、「何もしない」ことにより気付かされたのである。

アーティスト、先生、子どもたち、更には自分自身との対話が欠除していること。そして、教育現場という状況に対しての可能性や違和感、疑問などを感じ取り、考えることが圧倒的に不足していたことを思い知る機会となった。

それは同時に、これまでの活動の在り方そのものが、本来当事者である先生方や子どもたちの「学校という場について自ら考える」という行為を奪ってきたのではないかという疑念を抱くことにも繋がっていった。

これまでの活動すべてが、そうした主体性や能動性を奪ってきた訳ではないと考えているが、状況を変化させる為の場づくりにおいて重視してきたのは、今回意識的に排除した「アートによる体験の場」を生み出すことに奔走してきたことは間違いない。

今回の活動を通じて、単に奇抜で目新しい「アート」を学校に「とどける」ことで「体験の場」を生み出すことをゴールに設定するのではなく、アーティストの存在やその活動の「体験」をきっかけに、場の当事者である先生や子どもたちが、日常に疑問を抱いたり、共に考えたりする「思考の場」を育むことこそが、私たちの目指す状況の変化に繋がるのではないかと考えるに至った。

ちなみに矛盾するかもしれないが、アーティストは、決して何もしなかった訳ではない。ヘルメットにカメラをくくり付け、学校の日常を撮影した。その映像を編集し、学校内の10カ所に「伝言モニター」という名の小型モニターを設置し日々上映した。「アーティストってどんな人?」と書かれたボードを持って子どもたちや先生に質問していくこともあった。ただそれらは、何かのゴールに向かって創作の結果生み出した作品ではなく、子どもたちや先生が自らの日常を別な視点から再認識する為の装置にすぎない。そこから何かを感じ、考えるきっかけを生み出すかもしれないし、そうではないかもしれない。いずれにしてもこれまでのおとどけアートで生み出されたものとは明らかに意図が違うものであったことを補足しておきたい。

しかしながら暗中模索し、学校を徘徊する藤木氏の行動は、その場にいた子どもたちや先生たちにはどのように映ただろうか。

ある女子児童が藤木氏に対して、「藤木さんにとっては、アーティストってどんな人だと思いますか?」と質問してきた際の戸惑いと表情が忘れられない。

今後も藻岩小学校での藤木正則氏の活動は続く。

## 大人がお膳立てしたもの／子どもがふと見つけるもの

近頃の子どもは受け身だと言われて久しい。

でも、遊びもなんでもかんでも大人が準備してしまっているのも事実だろう。

しかし、たまにはアーティストが敷いたレールに乗っかって

やってみるのも悪くはないように思う。

でもやはり、「それって、尚更なにかがズレてはいないだろうか？」という気持ちにさせられる。

一見良く出来たアートプログラムは子ども達を熱中させ、ワクワクさせる。

熱中すること、ワクワクする事は大切だけど、

やはり、その前提を考えることの方がもっと重要かもしれない。

与えられたものでしかなかったとしたら・・・

時間が経って振り返った時、何が残るか、考えてみた事はあるだろうか？

現象として、その成果を評価することも悪くはない。

目の前の成果は事実なのだから、

でも、大人が意図したプランは大人に一番見栄えが良いようになってしまう。

子ども達自身にとって感性とは、創造性とはどのようなものなのだろう？

ぼく達大人は常に自問しなければならない。

往往にして、結果だけが取りざたされる事は少なくない。

でも、大人がお膳立てした企画が誘発するかたちで、

たった一人の子どもが、大人に背を向け、自力で他のなにかに気づいているかもしれない。

そして、そこにしかアートの芽生えの可能性はないようにも思う。

藤木正則



# 北陽ミ術館 札幌市立北陽小学校×加賀城匡貴



パフォーマーの加賀城匡貴さんが、北陽小学校を見立て作品の美術館「北陽ミ術館」に変えてしまいます。「見立て作品」とは、既存のものを別の見方で捉えることでそれが人の顔や動物、自然はたまた奇想天外な別の何かに見えてしまうという作品です。子ども達は学校内(教室や廊下、体育館、グラウンドなど)や周辺地域にある様々なものを見立てて、作品を制作してゆきます。また、子ども達は美術館の学芸員として北陽ミ術館のオープンに向けて、広報チラシや招待チケットの制作やオープン当日の受付、作品紹介といった役割も担い、12月6日の一般公開日には地域住民も含むの多くの人たちが訪れました。

期間: 2014年8月20日(水)~12/6(土) 隔週登校一全17回

場所: 札幌市立北陽小学校(児童数313名、教職員23名)



**加賀城匡貴** 札幌市在住/パフォーマー

笑い、アート、教育をインスピレーションソースにした作品を発表している。主な活動に、ステージパフォーマンス「スケルトン」など。テレビ番組「ミ・タテ」(2012年、NHK Eテレ)企画・構成。同番組は、札幌ADC準グランプリ受賞、東京TDC賞ノミネート。著書に、「脳トレ!パッとブック」(教育画劇)。

## 活動に至る経緯・・

北陽小学校では2012年度より一般社団法人AISプランニングと共に様々なアーティスト・イン・スクール事業が行われてきた。事業を通じて、アーティスト(芸術家)がもたらす価値観や視点を体験する場や、主体的に創作活動に関わる場、新たな人の流れやつながりを生み出す場を作ってきた。それを踏まえ、2014年度は小学校が地域の人々の集いの場となる事を目的として活動が行われた。



加賀城匡貴/開放図書館オープンCM作成  
(コミュニケーション教育事業 2012/10/17~11/15)



佐藤隆之/切り絵の森~モミジ祭~  
(おとどけアート 2013/9/1~12/24)



風間天心/来来光楽園  
(札幌アーティスト・イン・スクール事業2014/2/10~21)

## 現場で起きていたこと

### 「北陽美術館」

児童や保護者、地域住民をひき込むきっかけとして、小学校に「見立て作品の美術館」という新たな機能を生み出した。



### 「見立て作品の鑑賞と制作」

作品を通じて既存の認識とは異なる見方を受け入れること(鑑賞)と、能動的に新たな視点を探す行為(制作)がその場に表れた。



### 「学芸員制度」

北陽美術館を運営する学芸員という立場によって、参加者が当活動に主体的に取り組む状況が生まれた。



### 「近隣店舗での活動」

小学校近隣の銭湯へ出向き制作活動を行い、小学校と地域との接点を生み出そうとした。(作品は北陽美術館内で展示)



### 「周辺地域に向けての広報」

北まちづくりセンターを介し町内会への活動の告知、札幌市内小学校へのチラシを配布、近隣地下鉄構内のポスター掲示などを行った。また、インターネット上でも活動の公開(ブログ)や活動に関与できる仕組み作り(Facebookページの作成等)を行った。



## 札幌市立白楊小学校×加賀城匡貴

場所: 札幌市立白楊小学校

期間: 11月7日、19日

対象: 3年1組34名、3年2組30名

### 「近隣小学校との連携」

近隣に位置する白楊小学校で見立ての活動を行った。活動は授業内で制作、発表が行われそこで生まれた作品は北陽美術館内で展示された。小学校を通じた活動の周知と共に、関わった教員・児童、その保護者といった人の流れを生み出そうとした。



# 北陽三術館OPEN 北陽小学校×加賀城匠貴

日時: 12月6日(土) 10時~16時 入場: 無料  
来場者: 児童106名、教職員、保護者36名、一般96名



来場者のアンケート:

・学校全体が美術館になるなんてびっくりしました。(40代女性)

・子ども達の普段通っている学校という空間が、違った視点から捉えなおして見てみると、こんなに面白く豊かな場として立ち上がってくるのかと驚かされた。(30代男性)

・ストーリーが最高だ。見立てが分からないものがあると負けた気がしてしまう。(20代男性)

・とても楽しかったです。全部見ました。その感性に感動して泣けてきました。このような企画を立てて実施できる学校って素晴らしいと思います。(40代女性)



・誰もが一度は想いを馳せた空想の世界の一步は、ふんわりと青空に浮かぶ温かな白い雲の中にあつたように思う。クジラの背中に乗って世界一周の旅をしたり、巨大なアイスクリームに手を伸ばしたり…と。ミタテは、空想と創造を結ぶ架け橋かもしれない。あらゆる形、足したり引いたり、タテ・ヨコを逆さにしてみたり、あるいは、ぐるりと回転させてジッと観てみると、「見えてきた、見えてきた」。不思議に童心が蘇り、どこかに懐かしさに満たされる思いである。それにしても、子ども達が何百と採集したミタテを観るにつけ、空想力と創造力では大人の完敗と言えそうである。この度の息の長いおとどけアートのミタテの活動は、本来子ども達のもつ想像力に一層の磨きをかけ、「ものの見方の柔軟性」を培ったに違いないと思う。(北陽小ミニ児童会館館長)



## 活動後の広報

北区役所内(写真左上)、札幌サンプラザ(写真左下)、札幌市地下鉄駅校内(写真右)において活動説明・作品展示を行うなど、事後の広報も積極的に行った。



## 北陽ミ術館の活動を振り返って

### 活動で見えてきたこと

12月6日(土)の北陽ミ術館の公開日に行ったアンケートによると、238名(内96名が一般参加者)が小学校を訪れた。活動展示を見に来る人々はもちろんのこと、それを運営する子ども達もまたその状況を楽しんでいた。少ない準備期間であったため子ども達の動き(受付業務や作品ガイドなど)には不安があったものの、こちらが予想していた以上に初対面の大人たちと物怖じなく関わっている様子が見受けられた。それは、小学校自体が地域の集いの場として機能する上で、児童たちが持つ力、可能性を示してくれる重要なものであった。

### 課題 「関わり合う相手」

小学校での活動ということもあり、自然と関わり合う相手が子ども達中心となる。そしてこれまで、アーティストによる創作活動によって子ども達がひき込まれ、その子ども達の変化から大人たちが変化してゆくという流れを幾度も目にしてきた。それゆえに、特に教職員の方々は、学校運営に負担をかけずに活動を行うといった側面から、直接的な関わり合いを積極的に行ってこなかった。しかしながら、小学校が集いの場として成立するためには教職員、保護者、地域住民といった学校関係者との関わり合いが必要不可欠であり、それを生み出す働きかけが必要である。

### 対策 「活動の過程と結果」

北陽ミ術館の開催という目標が、その場に新しい流れを生み出した。作品制作や運営準備といった過程の中で、人が集まり出会いが生まれていった。今回、その過程の部分子ども達が担うことで活動が進んでいったが、この部分に一般市民が参加できる仕掛けを作ることで、より主体的な協力者を獲得することができるのではないか。例)見立て作品制作ワークショップの開催  
また、活動の流れを理解できるように、期間中に「過程と結果」が俯瞰できるような仕掛けを設定することで、より多くの参加者を巻き込むことができるのではないか。例)北陽ミ術館プレオープン

### 来年度に向けて

北陽小学校において、2015年度も活動を継続することが決定している。上記の課題や対策を踏まえ、コーディネーターは学校内の余白を探り、外とのつながりを作り出してゆくことが必要とされる。

## 風景の裂けめ 札幌市立山鼻小学校×持田敦子



山鼻公園内に制作された巨大な雪山。そこには木製のドアが据え付けてあり、中に入ると狭く蛇行した通路が続いている。通路内には雪から掘り出された公園のベンチや、札幌軟石の断片が点在し、鑑賞者はそれを踏み超えて通路を進む。夜には石を燃やすパフォーマンスを行った。

### ■活動内容

アーティストの持田さんが小学校の向かいに位置する山鼻公園を舞台に雪の作品制作を行いました。公園内での雪山制作や小学校内での壁新聞制作を行い活動には児童だけでなく教職員や地域住民も参加し、最終日のおひろめ会には多くの方が訪れました。

### ■活動概要

場所：札幌市立山鼻小学校  
期間：2015年2月9日(月)～20日(金)  
参加対象人数：児童数520名  
教職員数27名  
一般参加者約200名  
活動場所：山鼻小学校、山鼻公園



持田 敦子 東京都在住 / 芸術家

1989年東京都生まれ。東京藝術大学先端芸術表現学科大学院在籍。主に日常空間や公共空間の中に仲介する建築的なインスタレーション作品を制作。現場を借景とし、空間に予期しない「何か」が現れることにより、その空間への知覚方法が変化すると同時に、一時的に空間の意味合いを変える。もしくは、本来の意味合いを可視化することができる作品を制作。※借景・庭園外の山や樹木などの風景を庭を形成する背景として取り入れたもの。



## 開催に至る経緯・・

おとどけアート事業が小学校で開催される経緯として、小学校側からの要請がある場合と実行委員会から小学校に打診をする場合とがある。今回、山鼻小学校での開催は多少事情が異なる。

山鼻小学校と実行委員会の事務局(活動のコーディネーター)を務める一般社団法人AISプランニングは事務局が近い事もあり、地域行事を通じて関係を持っており、小学校や商店街が積極的に地域をつなげようとしていることを知っていた。そういった状況を踏まえ、活動がどう展開してゆくのかという期待を抱き開催を依頼した。

## 学校の思い、アーティストの向き合うもの・・

山鼻小学校での開催が決定し、コーディネーターと学校関係者の打ち合わせが行われた。小学校がこの活動に期待するのは「子ども達の記憶にずっと残り続けるような活動」であり、活動期間は2月頃に設定された。「雪」をテーマにした活動ということで、雪に慣れ親しんだ道民には生み出せないような、強烈な印象を残してくれるアーティストとして持田敦子が候補に挙がった。彼女は日常空間に異物を取り込むことで、その場に力強い(一種暴力的ともいえる)違和感を生み出すことができる作家である。

## 「おとどけアート」が小学校にもたらすもの・・

アーティスト持田敦子が制作する作品をきっかけとして、日常の中に生まれる違和感、非日常といった「場」を作り出そうとした。その場の引力に引き寄せられた人々が、「出会い」「交流」し、多様な価値観やものの見方に触れる。そのきっかけ作りにアーティストの存在は必要不可欠であり、学校には人々が集う場として可能性を感じるのだ。

しかしながら、アーティストと小学校を引き合わせる際、(特に小学校側に)このような説明が不足していたことがあり、互いの目指すものの理解の違いが誤解や不安を与えてしまう結果をもたらしてしまった。

その反省を踏まえ、活動を進めてゆくうえでより密な情報共有と話し合いの場を持つことにした。イメージ共有を図るためのミーティング、アドバイザーを交えてのアイデアの練り直し、活動前の12月にはアーティストが小学校を訪問し各クラスの授業参観・給食交流、地域のリサーチ(行啓通商店街、山鼻公園、山鼻記念会館等)を行った。その際に持田敦子が知ったことや感じたこと、近況などを綴った壁新聞を制作し小学校の廊下に掲示するなど、教職員や児童に向けての情報発信も積極的に行った。

このような過程を経て、活動場所を小学校の向かいに面する山鼻公園に設定した。小学校の中だけで完結せず、地域につながってゆくための仕掛けであった。開催前までに何度も小学校や周辺地域に通い、話し合う場を幾度もつた上での決定であった。

そうして転校初日を迎える。前日、全クラスに「転校生が来る」といった書置きを残し、TV朝会ではセーラー服を着てのあいさつを行った。多大なインパクトを与え、活動初日が幕を開けた。 --詳細は「おとどけアートブログ」参照--

活動は前もって計算されたものではない。だから、よくわからないし先が見えない。しかしながら、そんな無茶に思えるアーティストのアイデアだからこそ、多くの人たちの考えや知恵、労働が必要になる。そして、活動が進んでゆくとつれ人が集まってゆく。「やっかいだな、面倒だな、と思うことはすぐに取りかかれます」といって笑顔で協力してくれた現場の先生、時間を見つけて小学校に来てくれた行啓通商店街の方々、毎日手伝ってくれた子ども達、様々な困難を経て作り上げた「場」には、多くの人の声と笑いと汗が、記憶として残ったのではないだろうか。

コーディネーター 小林亮太郎



# おとどけアート & 関連事業実績

## 札幌市(27)

- 2006年10月2日(月)～10月6日(金)・14日(土)  
『scherzo school～あでの魅力～』  
札幌市立清田小学校 × 加賀城匡貴(パフォーマンス)
- 2007年1月22日(月)～2月2日(金)  
『ゆきのくにのしるかね城』  
札幌市立山の手南小学校 × 野上 裕之(彫刻家)
- 2007年2月5日(月)～2月16日(金)  
『有明という土地の引力、人は旅を経てここに辿りつく。』  
札幌市立有明小学校 × 石川 直樹(冒険家・写真家)
- 2007年11月26日(月)～12月7日(金)  
『原始人になって洞窟をつくらう!』  
札幌市立新陵東小学校 × 宝音・図布(版画家)
- 2008年2月4日(月)～2月15日(金)  
『抱腹☆絶頂 うーおるけーのFUJISAN』  
札幌市立新光小学校 × 河田 雅文(美術家)
- 2008年11月10日(月)～21日(金)  
『ゴ7=35(ごしちさんじゅうご)』  
札幌市立太平小学校×高橋 喜代史(現代美術家)
- 2009年1月26日(月)～2月6日(金)  
『白い迷宮』  
札幌市立幌西小学校×ルカ ローマ(彫刻家)
- 2009年11月4(水)～11月13日(金)  
『ゆめのとんでんみなみ村』  
札幌市立屯田南小学校×今村 育子(現代美術家)
- 2010年2月8日(月)～2月24日(水)  
『サマーコレクションin冬』  
札幌市立北小学校×東方 悠平(現代美術家)
- 2010年10月12日(火)～12月3日(金)  
『たんぽぽタワー』  
札幌市立清田小学校 × 長谷川 仁(美術家)
- 2010年11月8日(月)～11月19日(金)  
『火星世界旅行』  
札幌市立福住小学校 × 斉藤 幹男(映像作家)
- 2011年1月19日(月)～2月4日(金)  
『みんな星だ! ☆ご近所の宇宙』  
札幌市立常盤小学校 × 富士 翔太郎(画家)
- 2011年2月7日(月)～2月19日(土)  
『ゆきだるまとチョコレート』  
札幌市立旭小学校 × 片岡 翔(映画監督)
- 2011年9月26日(月)～10月15日(金)  
『秋の心みつ基地』  
札幌市立稻積小学校 × 小助川 裕康(美術家・庭師)
- 2011年11月28日(月)～12月16日(金)  
『摩訶不思議プロジェクト』  
札幌市立あいの里西小学校 × 富田 哲司(現代美術家)
- 2012年1月17日(火)～2月3日(金)  
『マルダ宮でまるだき湯』  
札幌市立みどり小学校 × 山本 耕一郎(現代美術家)
- 2012年8月20日(月)～9月6日(木)  
『石山東ショールンピック』  
札幌市立石山東小学校×トムス・オルタナティブ(現代美術家)
- 2012年10月1日(月)～10月13日(土)  
『Tommyの字遊探検』  
札幌市立富丘小学校×本田蒼風(アート書家)
- 2013年2月1日(金)～2月15日(金)  
『スノーガーデンショー-inもみじの森』  
札幌市立もみじの森小学校×小川智彦(ランドスケープアーティスト)
- 2013年8月20日(火)～10月4日(木)  
『歌と記憶のファクトリー』  
札幌市立資生館小学校×アサダワタル(日常編集家)
- 2013年9月1日(日)～12月24日(火)  
『切り絵の森 ～モミジ祭～』  
札幌市立北陽小学校×佐藤隆之(芸術家)
- 2013年10月1日(火)～10月12日(土)  
『ミ』里塚小学校』  
札幌市立三里塚小学校×加賀城匡貴(パフォーマンス)
- 2014年2月10日(月)～2月21日(金)  
『来光楽園-ライバルダンス-』  
札幌市立北陽小学校×風間天心(芸術家・僧侶)
- 2014年8月20日(水)～12月6日(土)  
『北陽美術館』  
札幌市立北陽小学校×加賀城匡貴(パフォーマンス)
- 2014年9月16日(火)～9月26日(金)  
『50のいたずら』  
札幌市立元町小学校×ダムダンライ(芸術家)
- 2014年11月4日(火)～11月15日(土)  
『アーティスト・イン・スクール・モイロ』  
札幌市立藻岩小学校×藤木正則(芸術家)
- 2015年2月9日(月)～2月20日(金)  
『風景の裂けめ』  
札幌市立山鼻小学校×持田敦子(芸術家)

## 帯広市(4)

- 2005年1月24日(月)～2月4日(金)  
『小菅スケートスクール』  
帯広市立大正小学校 × KOSUGE 1-16(美術家)
- 2006年2月6日(月)～2月10日(金)  
『はなの劇場』  
帯広市立花園小学校 × 杉浦 圭太(俳優)
- 2006年2月18日(土)  
『歌つくる会』  
帯広市立大正小学校 × クニ 河内(音楽家/作曲家 & 野田 美佳(音楽家/打楽器奏者)
- 2007年9月18日(火)～9月28日(金)  
『自分のコマージュを作ろう!』  
帯広市立広陽小学校 × anti-cool(パフォーマンス)

## 羽幌町(1)

- 2009年6月30日(火)～7月1日(水)  
『天売写真館を作ろう!』  
羽幌町立天売小・中学校×石川 直樹(写真家)

## 美幌市(1)

- 2012年8月16日(木)～17日(金)  
12月1日(土)～2日(日)  
『はじめての写真展』  
アルテピアッツァ美幌×石川 直樹(写真家)

## 岩見沢市(1)

- 2012年10月13日(土)～14日(日)  
『顔出しパネルを作ろう!』  
岩見沢駅校内×長谷川 仁(美術家)

## ニセコ町(1)

- 2006年1月22日(月)～2月2日(金)  
『ドーム/DOME - みんなでドーム』  
ニセコ町立ニセコ小学校 × 磯崎 道佳(彫刻家)

## 豊浦町(1)

- 2006年11月7日(火)～11月17日(金)・20日(月)  
『そうきん船が行く - そうきんしっぷ』  
豊浦町立大岸小学校&鉱山分校  
磯崎 道佳(彫刻家)

## 松前町(1)

- 2010年9月27日(月)～28日(火)  
『松前写真館を作ろう!』  
松前町立松城小学校×石川 直樹(写真家)

## 虻田郡(1)

- 2012年1月12日(木)～13日(金)  
『雪の羊蹄山と住んでいる生き物を作ろう!』  
虻田郡真狩村小×長谷川 仁(美術家)

## 士幌町(6)

- 2006年12月4日(月)～12月15日(金)  
『物語から仮面を作ろう!』  
士幌町立北中音更小学校 × ルカ ローマ(彫刻家)
- 2007年8月27日(月)～9月7日(金)  
『ヒーローVSゴミゴミ怪獣』  
士幌町立佐倉小学校 × ルカ ローマ(彫刻家)
- 2007年10月1日(月)～10月12日(金)  
『たたく=命(人+人+叩)』  
士幌町立北中音更小学校 × 荒川 寿彦(太鼓奏者)
- 2008年7月23日(水)～8月1日(金)  
『むこうのさくら』  
士幌町立佐倉小学校×磯崎 道佳(彫刻家)
- 2008年10月6日(月)～10月17日(金)  
『はつがダンス』  
士幌町立北中音更小学校×平原 慎太郎(ダンサー)
- 2009年8月24日(月)～9月11日(金)  
『ターノタ星からの転校生』  
士幌町立北中音更小学校×タノタイガ(現代美術家)

## 大空町(1)

- 2013年11月21日(木)～22日(金)  
『最初で最後の写真展』  
大空町立豊田小学校×石川 直樹(写真家)

## 斜里町(1)

- 2014年7月14日(月)～15日(火)  
『最初で最後の写真展』  
斜里町立朱円小学校×石川 直樹(写真家)

## 中標津町(1)

- 2014年8月8日(金)～16日(土)  
『西竹ミラクルメリーゴーランド』  
斜里町立西竹小学校×長谷川 仁(美術家)

## 音更町(2)

- 2005年8月22日(土)～8月26日(月)  
『音更未来研究所』  
音更町立音更小学校 × ゴウヤスノリ(ワークショッププランナー) & 松本 力(映像アニメーションアーティスト)
- 2008年9月1日(月)～12日(金)  
『非日常のあたりまえ』  
音更町立東士狩小学校 × wah(参加型表現活動集団)

## 浦幌町(2)

- 2009年10月26日(月)～11月6日(金)  
『オホ 浦幌の大きな海の葉? 山の葉?』  
浦幌町立厚内小学校×開発 好明(現代美術家)
- 2011年9月20日(火)21日(水)、11月23日(水)～25日(金)  
『鮭の一生ドキュメント』  
浦幌町立厚内小学校×石川 直樹(写真家)

## 幕別町(1)

- 2007年2月20日(火)～3月2日(金)  
『祭太郎が祭をつくる!』  
幕別町立達別小学校 × 祭太郎(パフォーマンス)

## 様似町(1)

- 2013年7月29日(月)～8月3日(土)  
『夜の展覧会』  
様似町立様似中学校×長谷川 仁(美術家)

## 中札内村(1)

- 2011年11月21日(月)～12月2日(金)  
『未来龍十勝大空風』  
中札内村立中札内小学校 × 遠藤 一郎(未来芸術家)

## 大樹町(1)

- 2010年10月25日(月)～11月5日(金)  
『大樹小で太鼓しよう!』  
大樹町立大樹小学校 × 荒川 寿彦(太鼓奏者)

## 主催及び関係事業一覧

- 十勝アーティスト・イン・スクール事業
- おとどけアート事業
- (財)北海道文化財団「文化の宅配便」事業
- トヨタ・子どもとアーティストの出会い事業
- 札幌アーティスト・イン・スクール事業
- (財)北海道文化財団「アート体感教室」事業

## 編集後記

「はじめに」で記した通り、2014年度の記録集は編集方針を大きく変更している。10年間の本事業の蓄積を踏まえ、アーティストが学校に入ることの意味と可能性、学校や地域との関係性、コーディネーションの在り方など、現場におけるリアリティと課題をより鮮明に描写し考察するよう心がけた。

これまでの記録集は、既存のわかりやすい評価尺度に接近した一定のフォーマットの中で、どの活動も同じような見せ方になっていた。実際に現場で思考したり対話したり目指していたことが、そこでは抜け落ちていたかもしれない。

こうして2014年度の活動を振り返ってみると、学校はそれぞれ固有のポテンシャルや課題を抱えていて、どこも同じ学校はなかったし、アーティストもそれぞれ独自の視点と発想を持って学校に向き合う人たちであった。

今後は、既定の評価軸では測る事の出来ない多様な視点で、本事業を見つめなおす必要がある。それはつまり、ひとつひとつの実践の中で、関わりを持った一人ひとりが、自分たちにとってのアーティスト・イン・スクールとは何か？について考え、議論していくことかもしれない。

そのことは、これまでこの事業に関わっていただいた方々は勿論のこと、今後関わるであろうアーティスト、教職員の方々、地域住民の方々、延いては全国の教育関係者、アートプロジェクトの従事者と共にこれからも考えていきたい。

## 事業に関するお問い合わせ

おとどけアート実行委員会 事務局 一般社団法人AIS<sup>アイズ</sup>プランニング  
〒064-0811 北海道札幌市中央区南11条西7丁目3-18  
TEL:011-596-6726 FAX:011-596-6727 E-mail:info@ais-p.jp HP:http://ais-p.jp/  
事務局担当: 小林 亮太郎 電話: 070-5288-5367 mail: ryotaro@ais-p.jp

### おとどけアート実行委員会とは？

2008年設立。会員数21名。大学教授(北翔大学、北海道大学)や、市内小学校教職員、文化団体職員、アーティスト、学生などの市民で構成。おとどけアートの活動を通じて子どもたちが豊かな感性と多様性を学び、地域の人々とのつながりを活性化、促進することを目指す。

おとどけアート事務局 一般社団法人AIS<sup>アイズ</sup>プランニング  
子どもたちを対象としたアート活動を通じて、既存の機関(学校、文化施設、商店街、公園など)に創造的な場を作り出します。それによって人々の交流を促し、地域に暮らす人々がぎすぎすなを深め、文化的・精神的に豊かな社会の創造を目指します。

過去の活動は**ブログ**からご覧いただけます。 [inschool.exblog.jp/](http://inschool.exblog.jp/) **「おとどけアート」**で検索！

## 募集

### 2016年度(平成28年) おとどけアート開催校募集中

【開催校数】 札幌市内小学校 3校  
【開催時期】 8月～2月 (活動内容により要検討)  
\*ご質問は担当までお気軽にご連絡ください。

### 活動スタッフ随時募集中

おとどけアートをもっと知りたい、活動に関わりたいという学生や一般の方々を対象に活動スタッフの募集を行っています。事前準備や打合せから関わりたい方から、小学校での活動(1日でも可)に参加したい方まで、幅広く募集をしています。実際の活動だけでなく、おとどけアートに関する説明なども行っております。一緒に活動を盛り上げたい、興味・関心がある方はぜひご連絡ください。

#### 【札幌アーティストインスクール事業 おとどけアート2014】

主催:おとどけアート実行委員会  
共催:sapporo2 project  
助成:地域づくり総合交付金(北海道)、公益財団法人 福武財団  
後援:札幌市、札幌市教育委員会  
協力:札幌市立元町小学校、札幌市立藻岩小学校、札幌市立北陽小学校  
札幌市立白楊小学校、札幌市立山鼻小学校  
支援:札幌市  
企画・コーディネート:一般社団法人AISプランニング

#### 【札幌アーティストインスクール事業 おとどけアート2014記録集】

発行:おとどけアート実行委員会  
協力:難波幸子、ダムダンライ、藤木正則、加賀城匡貴、持田敦子  
札幌市立元町小学校、札幌市立藻岩小学校  
札幌市立北陽小学校、札幌市立白楊小学校  
札幌市立山鼻小学校、札幌市  
撮影協力:ハレバレ写真  
企画・制作・編集:一般社団法人AISプランニング

本事業は「第三次札幌市新まちづくり計画」の一環として企画・実施されております

